



第二十三回

# 仙台青葉能

喜多流能

高砂

佐々木多門

和泉流 狂言 栗焼

人間国宝

野村 万作

喜多流能

枕慈童

人間国宝

友枝 昭世



2020年5月16日(土)

午後1時30分開演(12時50分開場)

電力ホール(仙台市青葉区)

入場料(全席指定・税込)

S席 11,000円 A席 8,500円

B席 6,500円 学生席 2,500円

2月14日(金) 10:00~ 一般発売

主催/ 仙台青葉能の会、(公財) 仙台市市民文化事業団  
河北新報社

共催/ 電力ホール

◆協力 仙台市博物館、中尊寺、(公財) 瑞鳳殿  
NHK 仙台放送局、伊達家伯(かほく) 記念會  
白石市古典芸能伝承の館「碧水園」

◆後援 宮城県、仙台市、宮城県教育委員会  
仙台市教育委員会、仙台市能楽振興協会

TBC 東北放送、仙台放送、ミヤギテレビ  
KHB 東日本放送、Date fm  
松井建設 東北支店

**プレイガイド** 藤崎、仙台三越  
仙台市市民文化事業団  
河北チケットセンター (電話受付のみ)  
☎ 022(211) 1189 ※10時~14時 土・日・祝休  
チケットぴあ (Pコード 500-174)  
※学生席は河北チケットセンターのみで販売  
※未就学児のご入場はご遠慮ください。

**お問い合わせ** 河北新報社事業部  
☎ 022(211) 1332  
※10時~17時 土・日・祝休  
※伊達家より家紋使用許可済み

「枕慈童」  
友枝昭世 所演





※伊達家より家紋使用許可済み

第二十三回

# 能 青葉 仙台

## 献香之儀

仙台伊達家十八代当主 伊達 泰宗

開演 午後一時三十分

一時四十五分

シテツレ・老嫗 友枝 真也

後シテ・住吉明神 佐々木多門  
前シテ・老翁

喜多流

能

## 高砂

たかさご

ワキ・阿蘇ノ宮ノ神主友成 森 常好  
ワキツレ・從者 舘田 善博

アイ・高砂ノ浦人 石田 幸雄

後見 友枝 雄人  
金子敬一郎

大鼓 國川 純 太鼓 小寺真佐人  
小鼓 鶴澤洋太郎 笛 松田 弘之

地謡

佐藤 陽 狩野 了一  
大島 輝久 大村 定  
内田 成信 塩津 哲生  
塩津 圭介 長島 茂

——休憩二十分——

和泉流

狂言

## 栗焼

くりやき

太郎冠者 野村 万作

仕舞 飛鳥川

あすかがわ

佐々木宗生

主 中村 修一

後見 破石 澄元

地謡

佐藤 寛泰  
内田 成信  
粟谷 明生  
塩津 圭介

喜多流

能

## 枕慈童

まくらじどう

シテ・慈童 友枝 昭世

ワキ・勅使 森 常好  
ワキツレ・從者 舘田 善博

後見 佐藤 章雄  
狩野 了一

大鼓 國川 純 太鼓 小寺真佐人  
小鼓 鶴澤洋太郎 笛 松田 弘之

地謡

佐藤 寛泰 長島 茂  
金子敬一郎 粟谷 明生  
友枝 雄人 香川 靖嗣  
大島 輝久 中村 邦生

終演予定 午後四時五十分頃

### 能「高砂」(たかさご)

阿蘇の宮の神主・友成が、播磨国の高砂の浦で松の木陰を掃き清めている老夫婦と出逢い、聞き及んでいる「相生の松」のいわれを老夫婦に訊ねます。

すると夫婦は、相生と呼ばれる「高砂の松」と「住之江の松」の夫婦の両方は、我ら夫婦のように高砂と住吉とに分かれ住みながら長い契りを結んでいて、生えている場所は遠く隔たっているが、古今集の序にも「高砂住の江の松も相生のやうに覚え」とあり、世の中が安寧に治まる和歌の徳として例えられるように、目出度いかたちを表しているのだ、と友成に説き教えます。

老人はさらに、我らは高砂と住吉の松の精である、と正体を明かして「住吉にて待つ」と言いつつ、小舟に乗って沖へと消え失せてしまいます。

浦人の造った新しい船に乗り、高砂から住吉へ着いた友成、やがて住吉明神が出現して、寿福増長と天下泰平を祝う舞を颯爽とみせるのでした。

### 狂言「栗焼」(くりやき)

太郎冠者は、主人から貰い物の栗を客に振舞うので焼くよう命じられる。苦勞しながらもなんとか焼き上げ皮をむくが、見れば見るほど美味そうな栗ばかり。つい手が出てしまい、結局全部平らげてしまった太郎冠者は、主人に言い訳をするのだが……

栗を焼き食べてしまう場面のシテの独演が見どころです。

### 能「枕慈童」(まくらじどう)

古代中国の魏の文帝の世。葉の水が湧き出ている源を探るために、勅使が派遣され、遠く遙かなる鄴縣山へと赴きます。その山奥に分け入ると、菊が咲き乱れる仙境があり、美童子が庵に一人住んでいたのです。

その童子は、魏よりも七百年前の周の穆王に愛され仕えていた慈童という者でしたが、誤って王の枕を踏み越えてしまった罪により、この山に流罪となっていたのです。流されるとき、不憫に思った王が法華経の妙文(四句の偈)を書き添えた枕を下賜されたので、慈童は山の菊の葉に詞を写しておいたところ、その葉の露滴が不老長寿の薬となって七百年間も老いを知らない身となったのでした。

慈童は、法華経の功德と由来を説きながら美しい舞を見せて、寿命を帝に捧げて祝福し、やがて庵へと帰っていくのでした。